

大宰府における六十六部聖の活動

平成4年、大宰府史跡第130次調査において、観世音寺南門跡の遺構から墨書のある木札が発見されました。木札は長さ33・2 cm×幅4・0 cm×厚さ0・5 cmの大きさで、表面には以下の記載があります。

唵

元亨三年 肥後国白間野庄西光寺
五月七日 六十六部写経聖月阿弥陀仏

墨書は、肥後国玉名郡白間野庄(現熊本県南関町一帯)の西光寺に止宿する月阿弥陀仏という聖が、六十六部の法華経を書写し、元亨3(1323)年5月7日、観世音寺に法華経1部を奉納したということの意味します。

「六十六部」は後には六部ともいわれ、六十六部廻国聖のことを指します。これは、日本全国66カ国を巡礼し、1国1カ所の霊場に法華経を1部ずつ奉納することをいとす宗教者です。

冒頭の「唵」は、インドで一般的に宗教的な儀式の前後に唱えられる神聖な音です。ヒンズー教の教義学習では、「唵」の音はa・u・mの3字から成るとして、それぞれ万物の発生・維持・終滅を示すと考えられました。のち、真言密教に入って神聖な呪語となり、たとえば「オ

ン・アピラウンケン・ソワカ」(大日如来の真言)など、真言(呪)の冒頭によく用いられるようになります。

ところで、豊後余瀬文書には戦国時代のものと考えられている六十六部奉納札所覚書があり、各国(ただし南海道ほか数カ国を除く)における法華経の奉納所が記載されています。奉納所となっ

ているのはその国における霊山・霊場で、一宮(国の鎮守神とされる神社)を多く含むという特徴があります。なお、筑前一宮は住吉神社(福岡市博多区住吉)ですが、この文書では筑前の奉納所は安楽寺(太宰府天満宮)となっています。

観世音寺と安楽寺の違いはありますが、六十六部聖の奉納所がいずれも大宰府だったことは注目すべき事実です。中世の大宰府は安楽寺・観世音寺をはじめとしてたくさんある寺社が所在し、かつ多様な宗派が流入する宗教都市というべき様相が見えます。奉納所が大宰府だったことは、他地域に対して筑前国内における大宰府の宗教的な優位性を示すと言えるかもしれません。

